

## 有坂秀世博士のこと

昭和55年11月14日(金)、京都外国語大学で開かれた中国語学会第30回大会で、私はシンポジウム「中国語音韻史研究の現状と問題点」の責任者として、みずからも「前史―石塚龍麿から有坂秀世まで―」という題で報告をおこなった。これは、昭和54年10月以降翌年1月まで『河野六郎著作集』(全3巻、平凡社)が刊行されたので、とりわけ『河野六郎著作集2 中国音韻学論文集』(昭和54年11月)の史的位階づけをおこなうのが中心テーマであった。私が河野氏に至るまでの前段を担当し、直弟子の坂井健一氏が河野氏の人と学問について、頼惟勤氏が『河野六郎著作集』の書評、松尾良樹氏が河野氏以後の研究動向、特に類相関について論ずる、というのが当初の構想であった。残念ながら、健康上の理由で、頼氏の報告は実現しなかった。私は、いわゆる重紐研究を正面にすえ、河野「朝鮮

漢字音の一特質」に先立つものとして、石塚龍麿、八木美穂、草鹿砥宣隆、橋本進吉、有坂秀世をとりあげたのであるが、その中心は、もちろん、有坂秀世であった。

ところで、有坂氏は、昭和14年度、大正大学の講師として「國語學史」を講じた以外、教壇に立っていない。大学卒業後十年ほどは、多く病床にありながら常人の一生をしのぐほどの論著を書きあげ、その後十年ほどは、無念にも寝たきりの生活で、この世を去った。元来、研究、教育と生活の場は、截然と区別できるものではないが、有坂氏のばあい、研究と生活とは不即不離であった。有坂氏の拗音説(『重紐論』)を追跡すれば、歿後に刊行された『上代音韻攷』(三省堂、昭和30年7月)にさかのぼる。拗音説は、『上代音韻攷』から「萬葉假名雜考」(昭和10年7月)、「カールグレン氏の拗音説を評す(一)」、「(二)」、「(三)」(昭和12年11月、昭和13年3月、7月)を経て、四等專屬韻直音説を表明した「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」(昭和14年7月)に至って、一応完成した。ただし、著書「國語音韻史の研究」(明世堂、昭和19年7月)では、「拗音

説を評す(一) (二) を「同四」に従って書き改めている個所があり、全体としても修正がなされている。従って、完成は『國語音韻史の研究』においてであると解される。

さて、その出発点となる『上代音韻攷』の書かれた時期が問題である。その論点がここでほとんど出そろっているからである。河野六郎氏の「故有坂秀世博士遺稿『上代音韻攷』(昭和31年10月)によれば、「昭和7、8年頃に書かれたものらしい。」とされている。昭和7、8年といえ、『上代音韻攷』所収の「有坂秀世博士略年譜」に「昭和七年 発病、七里浜の鈴木病院に入院。昭和十年 全快、退院」とあって、闘病中ということになる。特に『上代音韻攷』の第三部「奈良朝時代に於ける國語の音韻組織について」(pp. 172-179)がいつ書かれたのか、という疑問が私の前に立ちはだかった。そのことは、病状がどうであったかということと密接に関連する。

有坂秀世ほどの足跡を残した人に対しては、言語学者や国語学者によってその闘病の軌跡が追求されていてもいいはずであるが、論著に対する書評はあっても

その「人」にふれたものはごくわずかで、闘病生活の詳しい軌跡として役立つものはなかった。こうなれば、自分で調べるよりない。鈴木病院が現在も七里ヶ浜にあるのを確かめて、私は鈴木病院に出かけた。同病院理事長(第二代院長)の好意によって、鈴木療養所(病院になったのは戦後のことであって、かつては結核療養所であった)の「入所患者名簿」をみる事ができた。何度か訪ずれるうち、残されている名簿から、

昭和6年8月24日入所、昭和7年7月10日退所、  
昭和8年7月1日再入所

というところまで明らかにすることができたけれども、二度めの退所月日を確定することはできなかった。各方面から推察して、昭和10年10月ごろと考えていたが、後に有坂氏の金田一京助氏にあてた昭和11年1月1日付消印の年賀状によって、10月末日に退所したことが判明した。これによって考えると、有坂氏は大学卒業の数ヶ月後に療養生活に入ったことになる。今日においても有坂氏の代表作とみなされる「國語にあらはれる一種の母音交替について」を同年5月に書きあげ、ほぼ同じころ「音聲の認識について」も書きあげて、

その疲労がもとで発病したのであらうと考えられる。両論文は、ともに『音聲の研究第IV輯』（昭和6年12月）に収められた。前者は「古代日本語における音節結合の法則」（昭和9年1月）に向かう実証的研究であり、後者は独自の言語理論を展開する『音韻論』（三省堂、昭和15年12月）の礎となった。かくて、当面する拗音説、さらにその部分を含む『上代音韻攷』の第三部の原稿二千枚余（二百字詰）のほとんどが、昭和8年8月以降12月末までの間に書かれたということになる。

有坂氏の入院療養は、このとき以外にもあり、また『上代音韻攷』の「略年譜」の記載に疑問を感じて、学士院賞受賞前後のことを問題としたり、大正大学での講義がどのようなものであったのか等々、その後私は、有坂氏の人と学問とに深く関わることになったけれども、その出発点について直接語ることはなかったので、ここではそのことだけをまとめることにした。

（平成4・11・27）